研究の栞

歐米人の書ける日本史の栞（第一回）

文學士
法學士　牧　健二

序說

十三世紀の終伊太利ベニスの人マルコ・ポーロ（Marco Poro）が書いた東方見聞錄（Oriental Travels）には、支那東方の海中にチパング（Zipangu, Zipangri, Cyampagu, Cipangu.）といふ大國があつて、此國は黃金が豐富であると言ふことゝ、蒙古の遠征軍を破つたと言ふことゝが、拉典文で麗々しく書かれた。日本の事が西洋人の書に見はれたのはポーロの此書に始まる。併し此書出でたる後日本に關する歐文の書物は長く見はれなかつたが、十六世紀の中葉以後日本と西洋諸國民との交通が開かれてより、日本に來れる宣教師旅行者等の通信記錄著書等に依つて日本の事が次第に西洋に知らるゝに至つた。斯くて幕末の頃には此等の西洋の資料に基いて、米人ヒルドレス（R. Hildreth）は歐米人の見たる日本の近世史を書くことが出來た。（Japan as it was and is. 1855.

Boston. 本書日本版一九〇二年村川博士序文參照）日本が開國してより後は日本に關する西洋人の著書論文等は大に增加した。此等の書物が如何に數多きかはウェンクスターン及び佛人バジェーの兩氏が夫々苦心して作れる日本關係の圖書目錄に依りて直に知らるゝ所である。兩氏の著書の名は次の如くである。

一、Léon Pagès, Bibliographie japonaise, ou catalogue des ouvrages relatifs au Japon qui ont été publiés depuis le XVe siècle jusqu'à nos jours. (1859). Paris.

（此書は又次のウェンクスターン第一卷に附錄として收めらる。年代順の書目である。之に補遺を加へて分類體にしたものが同書第二卷の附錄となつて居る。）

二、Fr. von Wenckstern, Bebliography of the Japanese Empire.〔大日本書史〕 being a classified list of all books, essays and maps in Europearan languages relating to Dai Nihon (Great Japan), published in Europe, America and in the East.

Vol I (1859-1893) 1895 Leiden.
Vol II (1894-1906) 1907 Tokyo.

之に依つても知らるゝ如く前者は略々幕末開國の時までのものを收め、後者は其後を享けて日露戰役の翌年までのものを二卷に作つたのである。此等の目錄には日本人の手に成れるものをも收めてゐるが其數は少い。そして日露講和以後日本の事に關して歐米人の書いた著書論文等は甚だ多數であるから、今若し此等を全部目錄にしたならば吾等は恐らく其數の餘りに多きに驚くであらう。そして此等の日本に關する書物の中日本の歷史に關するものも相當に多い。バジェーの目錄には歷史旅行記が大部分を占め、ウェンクスターンの書

目には、通史、古代史、一八五四年までの日本と他國民との關係の歷史、歐米の政府が近世になせる日本遠征（expeditions）の歷史、提督ペルリ遠征以後の日本近世等の項を設け、更に法律經濟其他の項目に於て各々の歷史に關する項を設けてゐる。

斯くの如く日本史に關する歐文の書籍論文は少しとせないのであるが、然らば此等のものは日本史研究の上に何程價値あるものであらうか。日本史研究の材料を西洋文の書類の中に求むべき場合に於て西洋文の材料の必要なるは論を俟たない。日本の基督教史や日本の開國史の如き歷史を研究するに當つては、研究の材料を歐文の記錄著書等に求むることを怠らないのを可とする。併し乍ら之とは異つて日本史に關する叙述殊に何等かの研究が歐米人に依つて成された場合に於ては、全く右と異なりたる意味に於て、吾等は其の叙述や研究に興味を覺え、利害を感じ、又は以て他山の石とするに足ることを知ることがあるであらう。從來見はれた西洋人の手に成れる日本史は果して如何なるものであつたか。

外國人が日本のことを何程理會して居り、如何に考へて居るかと言ふことは、情として吾等の知らんとする所である。更に外國人が日本のことを有るが儘に理會し同情を以て考へて居て呉れると言ふことゝ、之に反して其の知る所は事實と違ひ其の考ふる所は同情を缺いで居ると言ふことゝの間に存する著しい相違は、單なる感情上の問題ではなく、國民の利害問題となるのである。日本の今日の如き國際的地位に處しては此の事は決して等閑に附せらるべきではない。そして一國民の文明、性情・目的、努力等を正しく理會するが爲めには、必ず其の由て來る所の歷史を知らねばならぬ。それ故西洋人が如何に日本の歷史を見てゐる

かと言ふことは、日本國民に對する西洋人の眞の理會に關連し、從つて日本人の利害に影響する所が深いのである。斯かる理由よりして吾等は西洋人の書いた日本史を、假令それが平凡であつても知つて見たく、又國民生活の必要上より彼等の爲す所に就て全然無頓着であり得ないのである。

右述ぶる如きことは西洋人の書いた日本史でありさへすれば、直に起ることであつて、其の書物や論文が學術上何程價値あるやに關係しない。否學術上價値なきが如き虛妄の所說が實は大に吾々の好奇心を動かし又は利害の關係を大ならしめるのである。而して西洋人の書いた日本史は何程學術上の價値があるか、此の事は右の場合とは全く違ひ、內容に對する顧慮を少くして言ひ得ることでは無い。其の書いたものを讀んで見てこれを批評せねばならぬ。

從來彼等の著はせる日本史は、我國に於ては日本史研究上餘り注意を拂はれてゐない。之には色々の理由があるであらうが、實際に於て彼等の日本史には注意するに値するものが少いと思はれてゐるのである。最近原博士は歐米人にして日本の歷史を知らんとする人の爲めに日本歷史序論(An Introduction to the History of Japan, 1921. New York.)と言ふ書を出されたが、其中に歐米人は日本人の論理的理會能力を疑ひ日本の研究を成し得るものは彼等なる事を自負せることや(同書序文)、然るにも拘らず彼等の日本史研究が時としては日本の學者の氣の付かぬ眞理を把捉するも多くは日本の事物を見るべき正當の觀點を誤り、其の研究の結果が失敗に終れることを指摘し(同書第一章序論三頁)、更に今日我國に取りて大なる不幸は、我國の歷史が歐米の一流の歷史家によつて書かるゝこと少く、多くは二流三流の者の手になることであつて、歷史家と稱することの出來ぬ

やうな人々に依つて書かるゝことすら多きことを切論してゐらるゝ。（同一九頁）事情斯くの如くであつて、西洋人の書いた日本史には時々吾等を啓發するものもないではないが、一般に歷史としての價値の乏しいものが多いといふのが今日行はるゝ一般的見解である。

慥かに歐米人は、歐米人であるが爲めに日本史の研究に不適當な點がある。彼等は日本の事物（things Japanese）を見るに西洋史的な見方を行つて大なる誤を犯す。時に肯綮に中つた樣でも眞に中つてゐない事がある。又彼等は少數の者を除いては日本史の資料が自由に扱へぬから、徹底したことが言ひ兼ぬる。會々之を言ひば妄斷に陷ることを免がれぬ。併し又稽ふるに、歷史は觀察點の相違に依つて研究者に如何樣にも異なつた意見を建てしめるものであるから、若し研究者に歷史研究の能力があるならば、日本の資料が自由に扱へる人は勿論、然らずとも今日の如く內外人に依つて相當多數に日本史に關する歐文の書物が出さるれば、殆んど此等のものゝみに依るも、歐米人が日本史を研究し又は叙述するときには、自ら日本人とは異なつた有益な見解が出で來るであらう。

先歷史を研究する者は、出來得るだけ利害の觀念や種々の偏したる感情を去つて、平靜に論理に從つて史實を明にする事を要する。然るに自國人の書いた歷史は何うしても自國的の利害や感情に無頓着ではあり得なく又は之を脫し難いやうな嫌がある。例へば日本の神代幷に建國の歷史の如く研究の結果が國民の傳統的信仰に影響ありと思はれ易き部分や、又は日本と他國との關係に於て日本の名譽に關係ある部分などに於ては、日本人の成せる日本史の研究は、今日と雖も未だ充分忌憚なきを得ない。此點に至れば日本の歷史と何等の

係はりなき歐米人は概して無頓着であり得る。米人グリフィス氏は其著「みかど」(Griffis, W. E. The Mikado; Institution and Person, 1915)の中に次のやうな事を述べてゐる。

近世に於ける日本人の業績は偉大なるに拘はらず、彼等は未だ全く智能的又は倫理的に幼稚なる舊態(their intellectual or ethical childhood.)を脱して居ない。彼等の輿論と感情とを離れたる科學としての歴史(history as a science, apart from their opinions and feelings,)の概念は日本に於ては今尚ほ存在しない。「日本の二千五百年の歴史」に關する「教養ある」日本人及び知名の政治家の書ける流暢ではあるが價値なき記事(worthless statements)は文獻又は當時の記錄に基礎を置かざること、恰もユダヤ及キリスト教の世界を長く支配せしヘブリウの古代史に關する傳統的觀念に於けるが如きものがある。

グリフィス氏は日本史の資料は自ら自由に之を扱つたと言ひ、幕末以來親しく日本を知れる人で有益なる著書を成した人であるが、今より僅に六年前に於日本には輿論と感情とを離れたる科學としての歴史の概念が存在しないなどゝ言つたのは氏としては余りに不用意なことを述べたものであるが、茲に奇妙なことは、日本人が西洋人の日本史を批難する理由と同樣なことを、却て逆に西洋人が日本人の日本史を批評する言葉となしてゐることである。卽ち日本人の日本史が資料に忠實でないと言ふのである。今吾等は斯かる外人の不用意なる見解も矢張り或程度に於て取つて以て他山の石となすに足ると思ふ。日本人の强き尊皇心や愛國心が日本史の科學的研究を妨げたことは大なるものが無かつたであらうか。吾等は夫れを否み難い。學問は學問、輿論は輿論として其間に別の天地を見分けることは日本人には甚だ困難であ

つたやうである。斯かる事は日本史研究上今後共十分反省せらるべきことであると思ふが、歐米人は斯かる點に於ては無頓着で自由なる立場にあるそれ故に時として却て日本人よりも公平なる歴史研究を生み出す。只常に公平なりとは言ひ難い。否彼等が日本文明に對して有し來つた偏見が、往々日本史の正しき研究に累をなせることあるは彼等の爲に惜むべきことであると思ふ。

次に歴史の研究は研究者の興味（interest）に依つて、異なつた問題が選擇せられ、或は又同じ事物に付ても異なつた判斷が立てられる。日本史の研究に於ても西洋人の興味とする所には自ら日本人のそれとは異なつた所がある。そして今日の如く日本人の生活幷に思想が追々西洋化せられて行く時代に於ては、吾等の興味とする所も亦次第に西洋人のものに近いて行く點があるのを認めねばならぬであらう。之も亦西洋人の研究に一の長所となり得る點である。西洋人が先づ著目し、之に依つて日本人が興味を知るに至つた例は日本史の研究上に於ても從來往々あつたことである。

凡そ右の如き二つの點は西洋人であるが爲めに却つて日本史の研究に好都合であると思はるゝ場合であるが、更に一般に歐文の日本史は、日本人の手に成れると西洋人の手に成れるとを問はず、日本の歴史を西洋の歴史に比較して研究せられ又は叙述せらるゝことが多い。此は日本の歴史を西洋人が理會し、又は之を西洋人に理會せしめるが爲めに、自然に此の方法が採らるゝのであらうが歴史研究の上に於ける比較研究の重要なることを思へば、右の事實が日本史の研究に意義のあるのは明かである。そして殊に西洋人は自然に起る西洋文明と日本文明との比較に依つて、日本文明の特質といふが如きことには甚だ感じの鋭い點がある。

之を要するに西洋人の書いた日本史は、日本人たる吾等にとりては感情に基いた興味のあるのは勿論、其の眞僞が日本の世界的地位に關係する所があると言ふことに依つて吾等の利害の觀念を動かすのであるが、更に學問上に於ても右に述べた色々の理由よりして日本史研究上吾等の參考とすべきものがある。吾等は日本史の研究に於ても「鎖國」であつてはならない。國民道德は國史の縱横なる研究に依つて動搖するが如きものであつてはならない。國民道德は古い基礎の上に維持せらるゝと共に、新らしい基礎の上に生くべきものである。歐米人の研究には假令未熟なるものが一面に於て存するとしても、亦他面に於ては何等か新らしい所が又は眞理に近づく方面が存在するであらう。又今日よりも一層すぐれたる研究が將來彼等に依て爲さるゝに至らんことは望ましいことである。

さて茲に歐米人の書ける日本史の栞として數回に亘る豫定を以て述べんとする所は、彼等の日本史が果して如何なるものであるかを說かんとするのではない。茲に目的とする所は歐米人が書いた日本史の中で、日本史研究上有益であると思はるゝもの、及び有益と無益とに論なく吾等の注意を惹くに足るが如きものを紹介せんとするのである。それ故に、無益であり平凡であるが如く思はるゝものは之を省略し、又同じ書物の中でも右の標準に基いて紹介しやうと思ふ。もとより簡單なる紹介であるから要領を得ないことが定めし多いことであらうが、それは此の栞の性質上致し方がない。尙ほ余が現在の豫定では英文と獨逸文のものとで閲覽したものを紹介する考で居ることをも附言して置きたい。叙述の順序は

一、通史に關するもの、

二、時代史に關するもの、

三、事物史に關するもの

四、其他の著書論文等

尙此の栞に於て文中に挿入した洋數字は紹介しつゝある書籍の頁數を示したものであることを斷つて置く。

第一、通史に關するもの

1　ラートゲン著「日本人の國家及文化」

Karl Rathgen, Prof. Dr. "Staat und Kultur der Japaner." Leipzig. 1907. (Monographien zur Weltgeschichte von Heyck. XXVII.)

ラートゲン氏は獨逸の日本學者として有名であるが、氏は此書に於て甚だ要領を得た且啓發的な叙述を以て、日本文化の特質と發達とを論じてゐる。日本には今日も尙ほ古代の社會や宗教が保存せられ、又日本人は西洋人とは異なり、傳統と慣習とによつて國家と家とに屬し、近世の個人主義に依つてゐない、其の歴史は外國との關係は文化輸入の歴史であつて國内史は政治史であるといひ得ることなどを述べ(3-6)それより一、文化と國民性、二、上古、神道、三、氏族國家及君主國、四、支那文明及文學、五、日本の佛教、六、封建制度、七、十七世紀乃至十九世紀の國民文化、劇建築美術、、八、舊日本の倒壞と新日本の建設、の八章に亘り日本史を概設してゐるが、次の諸點は注意を惹くに足りる。

日本人は想像力に乏しい。それは徹底的でない思想の傾向に於て見はれるが、更に佛教は哲學的思辨的のものとしてゞはなく實際の道德の爲に行はれたことや、自然や歴史の學問が低級なる資料蒐集に終れることや、言語に於て人格化の表現が行はれて居ないことに依つても知らるゝ(7)。

日本人の性質は元來快活活潑で自由であつて南

國的(südliche)の氣質を有してゐた。上古に於て神道は社會秩序の維持力であつて、其の中心をなす祖先祭祀(ahnenkultus)は日本人に名譽と義務との觀念を養成した。時經ると共にミソギは亡くなつたが、祖先祭祀は佛敎輸入以後更に發達した。

日本には上古より統一國家(Einheitsstaat)が存し、天皇は官吏に依て之を治め且氏族の外に立つて居たとの考は神道家の說であつて、日本通のハーン氏(L. Hearn)の如きも之に依つて居たが、フロレンツ氏(K. Florenz)は此說を破つた。日本の上古には君民結合の統一國家はなかつた。結合の弱い氏族國家(Geschlechterstaat)あるのみだ。天皇の權力が昂まつたのは宗敎的觀念による。天皇は神性を有し最高の神性卽ち太陽の代表者である。何時の頃よりか太陽と天皇の祖先とに對する崇拜が一氏族の祭祀ではなく全體の祭祀となつた。何うしてなつたのかは知れぬが、太陽の祭(Sonnen-Kult)が皇居から大和の笠縫、後には伊勢に移されたのは其が外に見はれたのである。(30-33)

佛敎も支那文化も天皇の權威を昂めたが、又之を衰へしむる原因となつた。天皇の神聖な地位は始め神道に依て保證されてゐたが、氏族的地方的の神々と異つて世界的の神を有する佛敎の輸入は天皇の國家に於ける地位を强くした。(39.)併し天皇が佛敎に心醉して政務に遠かり又多くの寄附を行はるゝや、佛敎は天皇の權力を弱めた。(42)次に支那制度の採用も天皇を國務より遠からしめ高位の廷臣が之に代ふるに至つた。(42)

支那文化の輸入は日本人の生活を定まつた秩序に依つて拘束するに至つた。萬事につけて中庸を得る(schickliche)と言ふことが重んぜられた。茲に於て日本人の快活な氣質が大に抑へらるゝに至つた。(47-48)

外國文化に對する自國文化の爭は、國民精神の奥底より出るもの卽ち詩に依て最もよく之を見る支那の文學は獨逸に於けるラテン文學以上に日本を風靡しだが、其時に當り國民詩のみは能く自己を維持したるのみならず、時あつて勝利を博した日本の詩には歐洲に於けるが如く英雄詩（Epos）がなかつたのは注意を惹く。(48)

親房は日本に於ける最初の政治論者である。丁度其頃獨乙に於ても皇帝擁護論が起つたのは、注意するに足る類似(merkwürdige Parallelismus)である。(60)

佛敎が日本人の國民思想に影響したること最も深きものは輪廻轉生（Seelenwanderung）の信仰である。日本の普通人は涅槃（Nirvana）を知らず、其代りに美はしい樂しい天國の事を考へてゐる。佛敎の基調は明かに國民の意識に入つて、此世を浮世と思ひ、因果應報の念を懷いた。然し佛敎の解脫の思想（Erlösungsgedanke）は之を知つてゐない(62-63.)

日本の佛敎は統一の敎を見はしてゐない。宗派(Sekte)が澤山に分れて居て統一の觀念を求めるのを困難ならしめる。茲に"Sekte"といふのは"Schule"のことである。宗派の差の生ずるのは、如何なる佛を最も崇拜するか、又は如何なる聖典を最も尊ぶかと言ふ事から起る。(72.)

封建武士の忠誓に依る團結（Treuverband）は、直接上古の氏族の團結（Geschlechtsverband）から出でゝ、之に代るに至つた。忠誓の團結は血族の連絡と誓書(Urkunde)に血判をすることゝに依つて、血緣の團結（Blutsverband）となつた。此の結合に入つた者は共に主君の祖先を祭つたのである卽ち古の氏に代つて藩が起つた。兩者は共に强い結合であるが、解き得ると否とが異なる。(87-88)

江戸時代の國家は封建國家(Lehnsstaat)の形體

を存してゐるが、實質は強く統一された警察國家(Polizeistaat)である。大名は官吏たるに外ならぬ(94. 99.)

家康は日本第一流の人物である。軍人で外交家で政治家で且學問の擁護者である。彼は國民の藝術、武士の理想、支那文化及ひ國民化された佛教の信仰を融合した。ハーンの言ふ如くケーザルに比し得る。家康なくば今日の日本はない。(98)

武士的といふこと(Ritterlichkeit)の觀念に基き奇異なることは性の關係である。武士の間に廣く行はれた男色(Knabenliebe)は西洋人には珍らしい。又婦人の取扱は全く反武士的の如く思はるゝ。(102)封建時代に商人の地位が蔑視されたことは理會し難い。(103)階級制度は嚴重であつたが、武士と庶民との階級の差は超えがたいものではなかつた。(103)

江戸時代には役人は人民の輿論感情に注意を拂ひ自己の行爲に付て責任を負ふべきものであつた之は日本の最近の憲法の發達に役立つ所が多い。國民代表(Volksvertretung)の觀念は、一見したる程全く行はれなかつたのではない。(107.)

十七世に於て日本に於ける支那學の文運復興が行はれた。恰も君府の陷落により希臘の學者が多く伊太利に來たやうに、明が滿州に亡ぼさるゝや多くの明の學者が日本に亡命したが、當時日本には宋學による儒學が發達しつゝあつた。(108)

日本美術の特徴は技藝家的文化(künsteerische kultur)たる點に存する。裝飾的な派手な優しい點はあるが、壯重偉大な所を缺いでゐる。傳統によつてゐて自由な個性が見はれてゐない。日本では一度起つた型が經續して行はれて固まつてしまふ。傳統的典型的といふのが日本美術の特徴である。(8, 118, 122.)そして此事は又日本文化の性質を示してゐる。

日本の上古より今日に至るまで、氏族より藩に移り、藩より政黨に移れる一貫した精神がある。今日、日本に於て政黨と呼ばれてゐるものは、主義に基いて相對持せるものではなく、首領に對する黨員の服從 (persönliche Gefolgsamkeit) に依つて成立つてゐる。(136-137.)

此書の中で余の興味を覺えし所を約說すれば右の如くである。尙記事に關係ある繪畫、彫刻、建築等の寫眞挿繪百五十六枚を收めて、此等のものに依つても日本の文化を知らしめんと力めてゐる併し寫眞の選擇はよく出來てゐない。

2　ラツウレッテ著「日本の發達」

Latourette, K. S. "The Development of Japan." New York, 1918.

歐米人が歐文の參考書のみに依つて、日本の通史を書いたならば、如何なるものが出來るであらうか。最近米國デニソン大學の歷史敎授ラツウレッテ氏が書いた「日本の發達」は丁度此の答案の一つとなるであらう。氏は米國の大學に於ける日本に關する過程が甚だ少く、全極東に關する授業の配當さへ僅に半學年なるに、適當なる敎科書なき爲め敎授上の不便の大なるを遺憾とし、數年來日本史に關する著述を涉獵して此書を作つたと言つてゐる。

最初に日本の地理を述べ地理と日本史との關係を說いて歷史に移る。ペルリの日本遠征の時一八五三年を以て日本を舊日本 Old Japan と新日本 New Japan とに二分し、本書の記述を兩者に略々均分して居る。而して舊日本の歷史は、(1)國初より佛敎の輸入の時(五五二)まで、(2)それより幕府組織の時(一一九二)まで、及び(3)幕府時代(一一九二…一八五三)とし、幕府時代を一六〇三年家康の就職の年を以て二分して居る。次に新日本

の歴史は内的更新の時代（一八五三―一八九四）と日本が列強の列に入りたる時代（一八九四―一九一七）との二期に分たつた。

舊日本の文化の概觀と、舊日本と新日本との連絡に關する所説は本書中の主要なる部分を成して居つて、第六章舊日本の文化（80―103）に記述される。之に據れば舊日本より新日本への推移は、此の推移の始まる前に於る日本の文化の特徴を知らねば之を明にし難い。先づ十八世紀に於ける日本文化の特徴の一つは武士階級が支配的地位を有して居たことである。然るに此事は日本が新時代に處する上に甚だ好都合であつた。日本人は從來指揮者の統率の下に一致して行動するやうに訓練せられてゐたから、新時代となるや彼等は主として士族（ex-samurai）から出た新政府の當局者の下に統率されて目覺しく活動した。この點に於て日本は支那に比し著しく有利であつた。支那人は日本人の如く尊王愛國の念に依つて統一せられず、日本人の如き訓練が缺けて居た。武士の優勢であつたことは西洋との競爭の上にも好都合であつた。即ち日本は甚だ巧に西洋の陸海軍を見習ひ早くも西洋人を驚かした。然し他方には不利益を伴つた日本には往時商工業が蔑視せられ、資本の蓄積がなく、商船なく、又商業道德が立つて居なかつたから新時代に順應するのに困難を感じた。此點に於ても亦日本と支那とは著しい對比を示してゐる。

次に日本は藤原氏の時代から天皇は統治すれども政治をなさずといふ事が例として行はれた。此の事は將軍政治より天皇に屬する內閣政治に移るに好都合であつた。武士が天皇を以て正統なる主權者であることを知るに至つたのは德川時代である。封建制度が終ると共に、武士が主君たる大名に對して有してゐた忠義の念は天皇を中心として

結合した國民に吸收せられた。之は西洋人には了解し難い所である。

武士は名譽を重んじた。然し名譽を重んずるの念は封建時代以前より存在して、殆んど日本國民性の一つを成してゐる。日本人は個人の名譽を重んずると共に國民としての名譽を重んずる。彼の加州や加奈陀の土地問題の如きも單なる經濟上の問題ではなく、實に日本人の名譽心を傷づけると言ふことが、彼等を不快にする重要な原因である。

日本人は德川幕府によつて巧に統制されてゐた外國貿易は政府の支配に屬し、秩序と平和とは嚴格なる法の執行によつて維持せられ、連帶責負の制度が行はれて、家族は其成員の行爲には、村落は村民の行爲について責を負ふべきであつた。斯かる事情は新日本への推移に役立つた。新日本に於ては、國家が鐵道、電信、銀行、外國貿易等の事業を指揮奬勵した。そして斯く國家に依つて產業が統一せられたことは、二十世紀の國際競爭に於て日本が支那及太平洋方面に覇を稱する上に甚だ有利であつて、西洋諸國民の側に統一の少かつた時に際して多くの利益を收めた。

新日本の行政組織は官僚制度に依つて居るが、之は國民の活動を政府に依つて細心に監督するといふ德川幕府の政治の精神を、德川時代とは異なつた形式で繼承したものである。

舊日本の他の特徵は外國文化を同化することを經驗したことである。封建時代以前に於ける日本の文化は主として大陸文化の刺戟の下に成長した然し乍ら日本人は外國の文化を盲目的に模倣したのではない。漢字より假名を作り、武士道に儒佛の敎を入れ、美術に於ても日本の特色を發揮した（36, 60 參照）。其狀恰も中世の歐洲諸國がローマ文化の影響を受けつゝ之と異なつた新文化を作つ

たのと同樣である。アメリカ、インヂアンが歐洲文化の前に壓倒されたのと大に異なる。而して斯く大陸文化を同化するてふ經驗は日本が開國して西洋文化を採用する上に大に役立つた。日本人は數世紀の間外國文化を攝取消化するの途に慣れてゐたので、西洋文化の優秀なるものを採用することが甚だ容易であつた。此の點に於ても日本は支那と大に異なつてゐる。支那は中國と自稱して多年他國の敎師であつたが生徒ではなかつたから、西洋の文化を繼承するに就ても、日本よりは時期に於て遲延し、且一層多くの困難を感じた。

日本人は支那印度又はセミチック族の生活を形成する哲學倫理宗敎に匹敵するに足るべき夫れ等のものを創設するが如き力を見はさなかつた。支那の哲學者は研究せられ又屢々批判せられた。高僧は獨創的の精神を發揮して新宗派を創建したことはあつた。併し日本人の中何人も未だ曾て釋迦や孔子や朱子やソクラテス又はカンにト及ぶべき人とはならなかつた。日本人は寧ろ外國の文化を自己の必要に順應せしめて茲に日本の文化を作らんとしたのである。

日本の佛敎には六つの重なる宗派があるが其間にはキリスト敎に於て見る如き異敎の糺問や迫害が行はれなかつた。又日本の宗敎には西洋で見るやうな鋭い相違がなく同一の日本人が神社にも參詣し寺院にも參拜し又儒敎の敎にも從ふ。

日本の舊文化と、舊文化より新文化への推移に關して著者は凡そ右の諸點を注意し、尙更に武士道、家族生活、社會道德、美的生活等についても述べてゐる。そして上述に依つても知らるゝ如く、舊日本は新日本への推移の準備をよく整へてゐたと言ふことゝ又この點に於て支那と日本とは相違が著しいことを力說してゐるのである。

日本史上の各時代の事件に關しては、日本の開

國に於ける外交關係を殊に重要視せる外、大體に於て變つた見解はない。明治時代に於て產業振興の爲め國家が中心となつて努力したことに注意しそれには一つには當時國家のみが資本あり信用ある唯一の組織であつたことゝ二つには前代に於て國家は國民活動を指導する上に絕對的の地位を有して居たことゝの二つの理由に依ると言つて居る(130)。

本書は平明簡潔なる叙述をなしたものであつて(紙數二二四頁)日本に關する理會に努めてゐる。極東に於ける日本の地位に關する所見の如き吾等の有する所と變りはない。本書の目的が一つには日米の親交の爲に存し、米國に於ける日本協會(Japan Society)の援助の下に出でたことも注意すべきである。(大正一〇、九、一)

紹介

圖書

◉日本書紀私鈔

聖岡著

本書は常陸爪連常福寺の什物にして了譽上人の著と稱せらるゝ日本書紀私鈔を星野日子四郎武田祐吉二氏の嚴密なる校訂を經て覆刻したるもの附するに高瀨承嚴氏の「日本書紀私鈔解題」及び「著者聖岡の事蹟及び思想」の二篇を以つてせり書紀私鈔は元と三卷、神代より神武天皇紀までの註釋を載せ第三卷の終に「人王百代具名記」を添へて神武天皇より後圓融院天皇までの歷代の御諱及び謚號を列記し別に吉野帝として「第九十六儀良、第九十七熙成、第九十八增長慶壽院法皇」を擧げたり歷代の御諱等に多少の誤謬あり吉野朝には長慶天皇と後龜山天皇との御登祚順位を顚倒したれども而も增長慶壽院法皇を擧げたるは天皇御卽位の考證に一の史料を加へたるものとして珍こするに足る本文の註釋は字句の解釋に止りその基礎